

P1-B-0210**変形性股関節症に対する人工股関節置換術患者における早期自宅退院時の主観的 QOL の評価
～日本整形外科学会股関節疾患評価質問表 (JHEQ) による調査～**櫻井 進一¹⁾, 岩田 瞳¹⁾, 荻原 裕輔¹⁾, 依田 英樹¹⁾, 市川 彰²⁾¹⁾佐久総合病院 佐久医療センター, ²⁾佐久総合病院**key words** 変形性股関節症・早期退院・日本整形外科学会股関節疾患評価質問表 (JHEQ)**【はじめに、目的】**

近年、変形性股関節症 (以下 OA) に対する人工股関節置換術 (以下 THA) 後における在院日数は短縮化しており、早期自宅復帰のための理学療法が求められている。しかし、PT には早期の自宅退院可否だけでなく、対象者の生活の質 (以下 QOL) や満足度にまで目を向けた治療を展開することが求められる。理学療法効果や目標を判断する基準として身体機能などの客観的評価指標が用いられる一方で、患者立脚型評価指標が近年注目され、早期退院を迫られる中で心理的不安を抱える患者に対する総合的な評価としても有用と考えられる。股関節においては日本整形外科学会股関節疾患評価質問表 (以下 JHEQ) による術前後の評価報告を多くみるが、THA 施行後の早期退院時の評価を行った報告は乏しい。

そこで、本研究では JHEQ を用いて当院における OA 患者の THA 術後早期退院時における満足度を評価し、さらにその要因について下位尺度との関連を検討することを目的とした。

【方法】

本調査は電子診療録を後方視的に調査して行った。対象は OA を罹患し当院関連施設において 2013 年 10 月～2014 年 9 月に片側 THA を施行後、理学療法を実施し早期自宅退院を果たした 28 例 29 関節とした。性別は女性 25 例、男性 3 例、平均年齢は 64.8 歳 (49～83 歳) であった。除外基準は、術後 1 週間及び退院時 (平均在院日数 16.5 日) における JHEQ アンケート回答に不備があるもの、在院期間延長に影響を及ぼす他疾患を発症したものとした。

JHEQ は、痛み、動作、メンタルの 3 領域の下位尺度から構成される自己記入式アンケートで、各下位尺度 7 問×4 点の配点が与えられ、点数が高いほど QOL がよいことを表す。また、単独の指標として股関節の状態不満足度を VAS (0-100 点) にて評価し、点数が高いほど不満が強いことを表す。

検討項目は術後 1 週時及び退院時における 1) 下位尺度ごとの合計点と総合合計点、不満足度の点数、2) 下位尺度、不満足度との関係性 (Spearman の順位相関係数)、3) 下位尺度の各設問ごとの平均値とした。統計解析ソフトは、JMP11 を使用し有意水準は 5% 未満とした。

【結果】

除外基準を考慮し採用されたデータは術後 1 週時で 13 例、14 関節、退院時で 12 例 12 関節であった。

1) 各下位尺度の合計点は、術後 1 週/退院時においてそれぞれ痛み 14.8 点/15.7 点、動作 4.9 点/9.3 点、メンタル 13.9 点/14.8 点、合計点 33.6/39.8 点、不満足度で 32.7 点/20.0 点であった。

2) 各下位尺度と不満足度との関係性は、術後 1 週、退院時ともに動作のみ股関節不満足度と有意な相関を認め (術後 1 週: $r = -0.665$, $p < 0.01$, 退院時: $r = -0.5923$, $p < 0.05$)、下位尺度間では術後 1 週においてのみ疼痛と動作間では有意な相関が認められた ($r = 0.6082$, $P < 0.05$)。

3) 下位尺度の詳細として、痛みにおいては術後 1 週及び退院時とともに、「痛みのために力が入りにくい」の項目で最低点 (術後 1 週 1.2 点/退院時 1.3 点) を示し、動作でも術後 1 週および退院時とともに「和式トイレの使用が困難である」、「足の爪きりが困難である」の項目で最低点 (ともに術後 1 週 0.36 点/退院時 0.64 点) を示した。

【考察】

片側 THA 後に術後約 2 週間での早期自宅退院が可能であった患者に対して JHEQ による評価を行った。その結果、術後 1 週と退院時とともに下位尺度において動作が最低値で、また不満足度との関係性が有意に認められた。また、術後 1 週時において疼痛と動作に有意な関連がみられ、疼痛項目では動作開始時の痛みが特に問題となっていた。臨床においても、術後早期は炎症症状や術創部痛、周囲筋の過緊張による疼痛などにより動作が阻害される場面が多いが、本結果にて主観的な側面からも疼痛と動作能力低下の関係性が確認された。

不満足度に有意に関連のあった動作では、和式トイレの使用や爪切り動作の点数が低値を示した。これらの特徴は THA 術前の OA への調査からも報告されており、早期退院を図るだけでなくこれら動作能力の改善を図ることが重要であると確認された。しかし、現状では下肢の支持性と股関節に大きな可動域を必要とするこれら動作の改善が、当院の早期退院における明確な課題となり、理学療法の内容だけでなく、術前や退院後の外来理学療法等の体制の在り方を検討する機会となった。

【理学療法学研究としての意義】

近年、OA に対する THA 術後の在院日数は短縮傾向であるが、理学療法の効果判定としては在院日数のみでなく、主観的 QOL や患者満足度も重要な側面と思われる。当院における THA 術後患者の早期退院における満足度とその要因について検討し課題を明らかにすることで、より質の高い理学療法の提供と QOL の向上に寄与していきたい。